

ベルグソンに於ける時間と永遠

唐 木 順 三

まづ我々はベルグソンの所説を見よう。

イデアが何故現實に墮したるか。この所謂解け難き謎もベルグソンに於ては既に謎たるを失ふ。「不動は運動以上にして、且不動性より轉化の生ずるは、減少或は稀薄化による」と云ふ假定を許容するとき、始めて時間對永遠の問題は不可解の謎として我々に提出されるのである。(Cf. *Creative Evolution*, tr. by A. Michell, p. 334.) 形相の哲學若くは觀念の哲學の根柢には、實在は現に變化しつゝあるけれども、本來から言へば變化すべきでない。經驗は明かに轉化を示してゐる。けれどそれは五官に現はれた實在、*sensible reality* に外ならない。理性によつて認められた實在 *intelligible reality* 即ちあるべき筈の實在は、感覺的實在よりも更に一層實有的である。而してこの種の實在に至つては決して變化しない。性質上、進化した、並びに廣袤上の轉化の根柢に

於て、精神は變化以上のもの即ち不變の性質、形相若くは本質乃至目的を探求せねばならぬ。」と云ふ原理が設定せられてゐる。(Cf. op. cit. p. 331.) 運動を不動化し、生命を硬化する、理智の優越を首肯するとき、我々は必然的にギリシヤ哲學に同意せざるを得ない。變化流動するものを嫌ひ、連續せざるものゝみを明瞭に思ひ浮べ得る、知は、流轉をば毫も變化せざる靜止的狀態の結合と斷定し、所謂その活動寫眞的方法によつて運動そのものをも説明せんと企てる。かくして一方に靜止點としての不變的形相、他方に之を貫通する變化一般が設定せられる。この definite なる形相の側を逆上ることによつて、その究極に、唯一概念、全實在の綜合を得、更にこの definite なる形相を否定して貫流する indefinite なる變化一般を降下することによつて、その究極に、糶糊たる “non being” を得る (Cf. op. cit. p. 344.) プラトンに於けるイデアと非有との對立、アリストテレスに於ける純粹形相と純粹素材との對立は、すべてかゝる方法によつて出で來りたるものであり、算數學に於て十と零とを得ば、その間に入るべき一、二、三、……八、九、等の數字を必然に得るが如く、ギリシヤ哲學なる莊麗なる大建築物は、この對立の中に建立せられたものである。

古代哲學はかくして獲得したる有と非有とによつて逆に宇宙の一切の事象を説

明せんとした。時間と云ひ、運動と云ふも畢竟絶對有がその實在性を減少したる時に生るゝものに過ない。「時間は不完全なる實在、自己の本體を見失つた實在が本體を探し求むる分野に過ぎぬ。」(op. cit. p. 336.) プラトンによれば神はこの世界を永遠的にすることが出来なかつたがため、これに時間を附與した。時間は畢竟、永遠の動ける影に外ならぬ。アリストテレスによれば「宇宙の運動は神の完全境に到達せんとする萬象の憧憬」であり、永遠と時間との關係は一邊は單項、他邊は無限の項の集合よりなる方程式の如き關係、また金貨と補助貨との關係 (op. cit. p. 343.) となつて、あたかもシ、フスの岩に於けるが如く、我々が有と非有との間を轉々とすること自身が時間であることになつた。絶對的知識の立場よりみれば、物理學はスポイルされた論理學に外ならず、(op. cit. p. 338.) 我々の一々の行動は、永遠に不變なる神の意企を時間なる現實の機の上に立つて神の生ける衣を織りなしてゆく梭の動きに外ならない。「ファウスト」中の天使等の歌ふ如く「ものみなは霹靂の歩みして、命せられし旅程をば進めども一人として主を究め得ず、然も不可思議に崇高なる天工は、莊麗なること開闢の日に異らずである。又一方之を不完全なる我々の知識に於てみれば我々の行爲は永遠に止揚し得ざる最後の統一を求めて進む。」Es irt der Mensch, so lang'

er strebt“ (Goethe; Faust, 317.) の streben の世界でありストリンダベルクの云ふ如く、二頭の怪物が日々その外表を換えて歩む永遠の休息の都たるダマスクスへの旅である。(ダマスクスへ[参照]かくして機械論と目的論との根本的對立の起原は遠くギリシャ哲學の中に存すると言はねばならぬ。然し目的論は機械論を單に裏より見たるものに過ぎぬと言ふことが出来る。

古代哲學に於ては時間^は理論^的には棄却し得るものであつた。時間界は畢竟實在の減少による一の假象にすぎぬ。この減少、缺乏を補はんとする動きこそ時間そのものゝ生ずる根據であり。一度完全境に達すれば、凡ての時^は停止してそのまゝ永遠となる。この流轉の相を脱して永遠不變なるものを求めることこそ哲學の任務であつた。古代哲學の復活たる近代哲學も、明かにその面影を存してゐる。スピノーザに於ては The world of time and space は直ちに The world of presentation or things であつた。(Harold H. Joachim; A study of the Ethics of Spinoza, p. 119, foot note) ライブニッツに於ても時間^は一種の混亂知覺に過ぎぬと斷定せられた。機械論も目的論も時間^は只實體の墮落によつて生じたる假象にすぎぬとするは同様である。イデアと現實流出説等何等かの意味に於ける二世界主義を奉ずる以上前述の如き歸結に達する

は當然の道行と言はざるを得ない。

ガリレイ、ケプラーを始祖とする近代科學は時間の極限點即ち永遠を想定し、時間
に價値づけをすることを否定することによつて古代哲學に反對した。彼等によれ
ば時間上のあらゆる瞬間は同價値にして時間是一個の獨立變數である。彼等は古
代哲學の奉ずる二形相間の時間を無限に分割する。時間には本來區分は存しない。
我々は任意に、且無限に一變化を分割することが出来る。時間は變化そのものとは
全く獨立に存在するものとして、單に時間そのものを計算し實變化を顧みない。宇
宙の流動の速さを如何程變じても彼等の獨立なる時間を扱ふ數學の公式には何等
の變化を及ぼさないのである。近代科學は變化を不變なるものゝ稀薄化なりとす
ることを否定せる點に於ては古代哲學と異ると雖も、其變化そのものを無限なる靜
止點に分割し、以て變化そのものを説明し得たりとするは、河上に無數の橋を架ける
ことによつて流水そのものを創造し得るとすると一般であつて古代哲學と等しく
理知の不遜を敢てしてゐると言はねばならぬ。

二

思惟よりも言語を、變化よりも不變を好む我々の常識は必然的に流動の記號シグナルのみを蒐集し、流れつゝある時タイム・プロセスよりも流れたる時タイム・プロセスに就かざるを得ぬ。従つて理知は不斷の變化たる生命そのものを掴み得ないのを特徴とする。(Creative Evolution, p. 174) 古代哲學の特徴たる二世界主義は變化を不動なるものより説明せんとする理知の試みにすぎぬ。イデアと言ひ、非有と言ふも、この無限なる流續を理知に依つて解かんとする不合理より出たる苦肉の策に外ならず、幾何學の世界に於て得意なる理知を不遜にも生命の世界に適用したるものである。不動を變化以上とみるは、單に理知の習慣性にすぎぬ。現象界を貫ひて絶對的なる科學ありとするは理知が自の職分を踏越えたる潜越である。かゝる理知の殻を破り素眼を以て外界に直面して見よ。其處には只不斷に發展しつゝある流續あるのみではないか。變化を一固定狀態より次の固定狀態への飛躍途上に於てのみ存すると見る理知を捨て、立つとき、眼前を過るものは變化するものではなくして一瞬もとゞまることなく常に變化しつゝある状態であり。「存在」とは即ち「變化」である。かゝる事實は自己の意識に對するとき最もよく體驗し得る。記憶は過去の何ものかを必ず現在の心的状態に扶植する。意識は轉々して次第に自身を太めゆく雪達摩の如く過去を負ふて常により新しき

ものへ進みゆくのである。人格は不斷に生長し、成熟する。我々の心作用が最も緊張するとき、即ち純なる作用の立場に立つとき、我々の人格を形成する諸部分は悉く相溶合して一點に集中し、銳利なる刀となつて認識の第一線を流れる。(Cf. Creative Evolution, p. 210—13.) Cogitans sum. とも云ふべき直觀の世界に於ては、萬象はその形を溶して一大流動の中に没する。一直線の上に釘付けられてゐたる過去は現在と合して、恰も妙なる音樂に於て、時間上の各音が相溶けて統一ある音の世界を現出する如く、一有機的全體オガニツク、ホレを形成する。即ち Pure duration might well be nothing but a succession of qualitative changes, which melt into and permeate one another, without precise outline, without any tendency to externalize themselves in relation to one another, without any affiliation with number: it would be pure heterogeneity. (Time and Free Will, tr. by Pogson, p. 104.) である。この純粹持續中に於ける瞬間的同時存在シユンタキ、ジユンコウ(一)の言葉それ自身不當であるが、幾千萬の相異なる印象の透入であり、すべてが質の中に還元せられて何等の量をも有しない。foreseeing = seeing = acting なる純なる作用の世界である。(Cf. Time and Free Will, p. 198.) 單に輪郭を定め、靜的なるもの、一般的なるものゝみを扱ふ概念的知識に禍せられざる直觀を以て對すれば、萬象は純質的變化の持續の中に存し、生命の大河の中を流れつゝある。

この流れは、やがて注ぐべき大海を有せず、又單なる廻轉でもない。流動の先にイデアも存せず、背後に非有も存せず、實在するものは只純なる流である。これこそ眞に内容ある時間であり、時間は創造そのものである。

純粹に性質的なる時間は之を區分することは出來ぬ。その刻々に於て内容を變じ、常に新しきものを創造する異質的時間ヘテロジイネス・タイムを量的に分ち得ざるは自然の理である。科學の扱ふ時間は、凡てかゝる異質的時間が空間に射影したる等質的時間ホモジイネス・タイムであり、所謂空間化されたる時間である。「流れつゝある時」は之を分ち得ざるも、「流れたる時」は之を任意に無限に分割し得る。然し「流れたる時」を如何に無限なる等質的瞬間に分割しても、是を以て直ちに運動そのもの、時間そのものを分割し得たとは言はれない。ツェノンの運動不可能論の根本的迷妄は、この「流れたる時」を分析することによつて「流れつゝある時」をも分析し得ると斷定した點に存する。ベルグソンはその三大著書及び他の二三の論文のすべてに於てツェノンの説を反駁してゐる。AよりBに動く手の運動は、そのまゝ一つの點である。若し此間にCなる點の挿入を許せばAは單一なる運動に非ずして、A C C Bなる二つの相異なる運動となる。純なる「時」の特徴はその不可分割性、創造性に存する。科學の所謂時間は單なる坐標に過ず、時

の最も抽象的なるものである。科學は理知の所産である。生命を如實に把束し得ざる理知が生む科學は必然的に變化の單なる記號、眞我の *spirit* 即ち空間化されたるもの、生命なきものしか知り得ないのがその運命と言はねばならぬ。

また一方、我々の一々の行動は單なる卷物を定められたるまゝに展げゆくものであり、我々自身立並べられたる街燈に順次に灯を點じてゆく點燈師にすぎざるものとすれば、時間は永遠なるものゝ影となり終るであらう。然し我々の一々の行爲は、其瞬間に於て一個の藝術家としての創作であり、常に新らしき筆を加へ行くのである。自然界に於ても同様現在に於ける物的現象の状態を基礎として、未來に於ける状態を豫知し、自然界の將來の歴史を現在に於て開展し得ると考ふるは人間の宿命的迷妄であつて、自然界はその内面的創造力により常に豫知し難き新らしきものを創造しゆくのである。かゝる創造性こそ時間の特徴である。時間のみが實在である。ギリシヤ哲學の永遠は概念的思惟の所産、單に現象の説明のために設定せられたる附加物にすぎず、即ち死したる永遠と言はねばならぬ。

ベルグソンによれば古來の難問たる時間と永遠との關係は、一に凝固的觀照を以て萬象を見ることに起因するのであつて、直接に之に對すれば一切は生成進展する

生命の澎湃たる波濤の中に存する。理知を捨て、所謂 *sub specie durationis*。錦田氏譯「ベルグソンの哲學」中「流動の哲學」(變化の知覺二〇七頁所載)に於て生命の流れを仔細に觀察すれば、その間に無限なる密度の差あることを發見する。若し下方に向へば持續は次第に弛緩し、その極限に於て全く反覆性、同質性となる。物質即ち之である。若し上方に逆上れば持續の密度は次第に加はり來り、その緊張の度愈々強ければ生命は愈々自由となり、愈々發展的となり、その全過去を持續の一點に集中して一大衝動となり、その極限に於て永遠となる。即ち「An der Grenze würde die Ewigkeit sein. Nicht mehr die begriffliche Ewigkeit, die eine Ewigkeit des Todes ist, sondern eine Ewigkeit des Lebens. Eine lebendige und infolgedessen eine sich noch bewegende Ewigkeit, in welcher unsere eigene Dauer sich wiederfinden würde wie die Schwingungen im Licht, und welche die Verdichtung aller Dauer sein würde, wie die Materialität ihre Zerstreung ist. (Einführung in die Metaphysik, s. 39.)」を言へる如くすべし⁽¹⁾。の流續は壓縮せられて一平面となりパノラマの如く無限なる持續を展開せしめる。この純反覆性の物質と、持續の他の極限たる生ける永遠との間を發展史的に考ふれば次の如く言ひ得る。生命の波濤は到る所に於て障害物に遭遇し、流れをせき止められた。先づ物質に於てこの波は化して一凝固體となり。次は植物に、次は動物に

於て、次第に流れの幅を狭められ、最後の一點に於てのみ生命は自由に流るゝを得た。人間の意識或は廣く *humanity* これである。(Cf. *Creative Evo* p. 280, 284) 一切の自然界は渾然たる無定形の一大生命がその發展途上に振捨てた影である。一塵芥が全太陽系との密接なる關係に於てあるが如く、すべて棄却されたる自然界の諸部分は、この *humanity* のよき旅づれであり密接分離なる關係に於て存し、且 *humanity* の先端は躍動する永遠に結びつく。個々の意識はこの全人間性の中に座席を有し、廣く自然界全體と握手してゐるのである。

以上が我々のうかがひ知り得るベルグソンの時間と永遠に關しての所説である。私は之を基礎として、その所論を再考してみたい。ベルグソンの直觀とは流動の兩極限たる物質と永遠との間を動くものであり、(*Einführung*, s. 39—40) 要するに *sub specie durationis* に於て萬象を見ることがである。然し果してかゝる見方を純なる直觀と言ひ得るであらうか。

Des Denkens Tadeln ist zerrissen,

Mir ekelt lange vor allem Wissen.

.....

ベルグソンに於ける時間と永遠

Stützen wir uns in das Kauschen der Zeit,

Ins Rollen der Regelmäßigkeit!

とファウストの叫べる如く、(1745—1755) あふるゝ人生の内容を限りある罫の中に止まらしめんとする理知が窮して一つの衝動を呼び起すとき眼前には流れて止まぬ波濤が見られるであらう。然し時の交錯と云ひ、事柄の逆巻と云ふも尙岸に立つての見方である。躍入せんとする瞬間の見方であり主客對立し未だ理知の殘滓を存すると言はねばならぬ。これがヘルグソンの所謂直觀の立場ではないであらうか。流るゝものは流れざる支點を豫想する。「意識への直接所與なる純粹持續は尙「意識」なる支點の前に展開せられたる世界たるを免れぬ。

註一、物質と永遠との兩極を最も判然たる形に於て書き現はしてゐるのは前掲 Einführung in die Metaphysik 中である。Creative Evolution, chap. III, "Intellect and Materiality," "Ideal Genesis of Matter," "Meaning of Evolution" 中及び Matter and Memory, chap. IV, p. 276—7 等に於ても同様なる問題が論せられてゐるが其處に於ては一方の極限たる物質は明確に記述されてゐるに拘らず、他方の極限は多く曖昧の中に殘され、永遠を説く瞬間に於て止まつてゐる。純粹持續を唯一實在とする立場に於ては、「永遠」を前掲の如く説くことは言過ぎの感なきを得ない。然し同時に、ヘルグソン自身の中にかゝる

「永遠」に對する見方のあつたことも否み難いと思ふ。

三

我々は此處に新しく時間成立の由來を考へて見たい。ヘルグソンの云ふ如く現在が感覺——運動的のものであり、(Cf. Matter and Memory, tr. by M. Paul and S. Palmer, chap. III, p. 177) 未來に食入る先端が我々の身體であるとすれば、我々自身はフアウストの言ふ如く、五官に結びつく心と、天上を望む心との交錯點と云ふことが出来る。(Vgl. Faust, III 1—7) かゝる状態を如實に現はすものは意志である。時とは actual と possible との接觸點なる意志が自身の中に含む irrational のものを振捨て、行く歩みであり、ロイスの言ふ如く Time is the form of the will を見得るであらう。プロチンガ “Time is generated by the restless energy of the soul seeking to express in matter the infinite and eternal fullness of being.” (Baldwin; Dictionary of Philosophy and Psychology. に依る。) と云ふ如く、現實に於ける不安未來に對する憧憬が存する所に始めて人格的時間が成立すると言はねばならぬ。現實の我は「不斷に惡を欲して善を残す」メフェイスとの絶へざる取組であり惡魔自身の惡は die Besessenen たる我々に於ては直ちに價值である。「カラマゾフ兄弟」中

に於ける惡魔の如き「不定方程式のx」は現實の到る所にひそみ、生命の根據としての否定(マイナス)は永久に消えやらず、惡魔は決して「オサンナ」を歌はぬであらう。(邦譯「カラマヅフの兄弟」新潮社版第三卷第十一編第九による。)意志はかゝる惡魔と取組むことによつて不斷に成長し、その否定方面として、時間と文化とを織りなすのである。ベルグソンの言ふ如く小兒に與へられた無限の生命の内容はその成長と共に棄却され、滂漉たる生命の流れは到る所に障害と會し、常に自身を捨てゝ行かねばならぬ。而してこの個我に於て捨てられたものこそ我々の人格要素であり實在たる生命の棄却は一方に世界史を形成し、他方に自然界を構成するのである。ニイチエの言ふ如く、「自我は超克せらるべきエトワス」であり、世界は自身の尾を食ふことによつて成長する蛇と言ふべきであらう。目的論、機械論はかゝる立場に於て成立するのである。かゝる不安と憧憬とが互に緊密に結びつき Cogitans sum. とも言ふべき純なる作用の流れに溶け合ひ、理想を現實に含み、その間髪を入れぬ底に達し、大藝術家の創作作用の如きものとなるとき純粹持續となり創造そのものとなる。「Essai」この立場に於てはかゝる考へ方は必然的に理知の固定化、所謂活動寫眞的方法として本末顛倒せるものとして否定さるべきであらう。然し、「Matter and Memory」に於て

ばかゝる立場を暗々裡に採用してゐるが如くに思はれる。即ち、現在知覺は純粹記憶中より有用なるものゝみを採用する所謂記憶心像と、未來に食入らんとする運動との交點に於て成立すると説くとき、明かに理知の作用を許してゐる。やがて食入る未來を許し、有用なる記憶を負ふ過去を許すこと自身既に理知なくしては能はぬのである。かゝる立場よりしては、時間^{Zeit}は現實と可能とを結ぶ意志の上に成立すると云ふ我々の立場を否定することは出來ぬと思ふ。時は直觀がくづれて反省的な構想力となるとき始めて成立し得 *für sich* の立場に於てのみ存し得るのである。自覺に達せず、従つて反省なき自我を *Für Ich* の言ふ如く無とするならば、時は只意識ある人間に於てのみ生きてゐると言ふことが出来る。ギユイヨオの言ふ如く動物及び小兒が何等の記憶なき夢の如き中に生活し、只永遠の現在の中に動きゐるものとせば、彼等は神と同じく「時」を離れてゐると言ふことが出来る。(ギユイヨオ、時間觀念の創成「第一章井上勇譯」参照) この意味に於て時は自覺せる自我の歩める跡である。ベルグソンが「現在なる瞬間は實在たる生命の連續の中に我々の知覺の行つた準利那的切斷クァンティタティブ・ディンクツィオンによつて構成されたものであり、此の切斷面こそ即ち物質であり我々の身體は物質界にあつて直接に流動を感知する部分である。我々の現在の現實

性は身體の現實的狀態に存し、物質は其空間に延長を有する限り不斷に始まりつゝある現在として定義さるべきである。その逆に我々の現在は我々の存在の物質性其者である。即ち感覺及び運動の總和である。(Matter and Memory, p. 178)と言ひ又我々は純粹に生命の潮ではない。物質によつて重荷された潮である。潮の凝固したるものを搬びながら進んで行くのが我々の運命である。(Creative Evo. p. 252)とか「生命の歴史は意識が物質を揚げやうとして尙且物質に壓倒された歴史である。」(Creative eEvo. p. 278)と云ふ言葉自身移して以て我々の人格時に該當することが出来るベルグソン自身「我等の考へ方はある程度迄目的論に與してゐる」(Creative Evo. p. 42)と言ふ如く、純粹持續は目的を中に含みて流るゝ作用であり意志に於て成立する時間と何等 Ordnung を異にするものに非ず、彼自身の云ふ如く單に緊張度の差異にすぎぬ。(前掲 Einführung in die Metaphysik, s. 39 及び Creative Evolution, p. 210 ff. によりて明なる如く、物質と永遠とは持續の兩限界であり、持續の緊張度の差によりて種々なる Eappen を生ずると説いてゐる。物質性によりて障害されること少ければ少いだけ持續はスムーズとなるのである。)

四

然し移り行くものゝ背後には之を中に含みて移り行かざるものがなければならぬ。理想と現實とは其背後に同一平面を許さねばならぬ。然らざれば理想そのものさへ存立し得ない筈である。宇宙が瞬間的に全然新しく生れ、人格が刹那刹那に死して又生るゝものとせば、昨夕の星と今夕の星とが同一なることを知り、昨日の我と今日の我との同一なることを知ることが出来ぬ。

Ichの自覺の前にすべてがIchであり、すべてが Nicht-Ichである直觀の世界がなければならぬ。判断の前に直觀がなければならぬ。直觀に與へられたる全體を主客對立の場に受取り、これを分析することによつて判断が成立するのである。特殊の背後には一般がなければならぬ。作用の背後には知るものがなければならぬ。特殊はこれあるによつて始めて特殊たり、作用はこれあるによつてよく接續的たり得るのである。然るに知るものゝ背後には更に知ることを知るものがあり、かくして無限に續くと考ふるとき、我々は必然的にスピノーザの *idea ideal* の連結を認め、この間に無限の *Parallelism* を許さねばならぬ。又特殊と一般との間には、之を結ぶ第三者

がなければならぬ。第三者と特殊との間に更に新らしき第三者を許し、かくして無限に續くと考ふるとき、プラトンのイデアはアリストテレスの合目的作用にその坐を譲らねばならぬ。かくして我々は「ファウストと共に」太初に「言葉ありき」を、太初に業ありき」と訂正せざるを得ないであらう。かゝる視點に立つとき、永遠はアリストテレスのエンテレキアの如く達すべからざる彼方に去る。

されどスピノーザの言ふ如く *idea ideal* の根源には *ideatum* が存し、作用の根底には *first and eternal cause* としての *first truth* がなければならぬ。すべての *parallelism* はこの中に含まれるのである。物を真と斷じ得るはかゝるものを我々が直觀に於て既に知りおるが故である。悟性認識はこの *first truth* を暗中摸索し、一步之に近づけばそれだけ具體性、眞理性を得ると云ふも、直觀に於ける明々白々の事實を假定し、一度これを掩ひ盡し、悟性認識はこれを得ることによつて眞となるとすれば、是明かなる循環である。これ我々が *ein Gottberührender Mensch* としてのスピノーザに無限の敬意を感ずると共に、體系哲學者としての彼に避くべからざる不安を抱く所以であらう。

ベルグソンの哲學はこの循環を克服することに其出發點を有し、アリストテレスと共に、すべてを主語となつて述語とならざる純なる作用の中に溶入すると共に、ア

リストテレスが假定した究極の永遠をも、理知の究語 *mere word* として否定したものと見ることが出来る。アリストテレスの立場の一面の徹底は必然的にベルグソンの立場に到らざるを得ないと思ふ。然し果してベルグソンの哲學に矛盾が無いと斷じ得るであらうか。ベルグソンは自身を名づけて直觀の哲學と云ふも、前言せる如く結果よりみれば單に悟性哲學の徹底に外ならぬ。悟性が純なる作用に到つたものに過ず、悟性が徹するところ自ら展けゆく境地である。然し悟性と直觀とは嚴密にその *Ordunng* を異にせねばならぬ。知るものは飽く迄働くものゝ高次であらねばならぬ。ベルグソンはその思惟動機としては、直觀を明かに悟性に對立するものとした。即ち彼によれば悟性は常に背後を見るものであり、直觀は常に一の動作となる。直觀とは即ち、「理知的でないもの」であり、「理知性を超越したもの」である。ベルグソンに於ては直觀と悟性とは同次元の上に相反して立つものである。直觀は何等その中に理知を含むことが出来ぬ。動作の中にのみ働き過去を映す鏡は全然その中に含まれてゐない。ベルグソンの直觀哲學が、その結果よりみれば悟性哲學の窮するところに一新面を開ひたに過ぎざるものとして終つてゐるのは、彼が直觀と悟性とを全然同次元の上に立たしめた爲であると思ふ。

かく見る時、我々は再びプラトニイズムに歸らねばならぬと思ふ。特殊の背後に一般を認めることは循環とも言はれやう。然しこれこそ避くべからざる循環である。意識の統一は一般なくしては成立し得ないのである。只我々はこれを循環と見なすとき直観と悟性とは明らかに相違せる次元の上に立つものたることを主張する。すべて移るものゝ背後には、これを含む一般がなければならぬ。意志に於て成立する作用の世界は、直観に於ける一者と直接なる關係をもたねばならぬ。一者なくしては作用其者さへ成立し得ぬのである。此處に再びファウストの「太初に業ありき」を「ロゴスありき」に換えざるを得ない。アリストテレスが作用の無限の彼方に追ひ去らしめたる永遠ば、スピノーザが、Whatever is, is in God, and nothing can exist or be conceived without God. (Ethics I, prop. 15) と言へるが如く再び作用の直後にこれを支持するものとして認めざるを得ないであらう。

ベルグソンが持續の兩極限を物質と永遠とし、直観はこの兩極限の間を動くものとする以上、その直観は常になる *irrational* のものを含有してゐると言はねばならず、且極限の零たる永遠は、只 *ε* が極微になりたることを示すに外ならぬ。アリストテレスの純粹形相もこれと同様に素材が極微となりたるまゝ尙その中に含まれてゐる。

ることを考ふることが出来ると思ふ。すべてを作用の中に含ませ意志或は悟性と直観とを同次元におくとき、かゝる歸結は當然の結果であらう。然し意志と直観、働くものと知るものと次元の異なることを認めるとき、ヘルグソンの立場は飽迄低次なる意志或は作用に於ける世界である。直観或は知るものに於ては、 x は完全に無となり、直観に於ける永遠はその極限に非ずして常住の對象であり、 x は ∞ に於ける零となる。スピノーザが 'Whatever the mind understands under the species of eternity, it does not understand owing to the fact that it conceives the actual present existence of the body, but owing to the fact that it conceives the essence of the body under the species of eternity. (Ethics, V. prop. 29.)' と言ひ、その證明に「精神はその身體の現在の存在を考へる限りに於て、時間に由つて決定せられる持續を考へ、又その限りに於てのみ、精神は物を時間に關係して考へる能力を有する。(Prop. 21, Part V. and Prop. 26, Part II.) 併し乍ら永遠は持續に由つて説明される事が出来ない。(Def. 8, Part I, and its explanation.) それ故に「精神はその限りに於て、物を永遠の見地の下で考へる能力を有せずして、精神がこの力を有するは、物を永遠の見地の下で考へる事が理性の性質に屬し」(Coroll. 2, Prop. 44, Part II.) 又身體の本質を永遠の見地の下で考へることが精神の性質に屬し (Prop. 23, Part V.) 且、これ

等兩者の外には、如何なるものも精神の本質に屬しないからである。(Pop. 13, Part II) 従つて物を永遠の見地の下で考へるこの能力は、精神が身體の本質を永遠の見地の下で考へる限りに於てのみ精神に屬する。」と言へるが如く、(註、スピノーザに於ける理性は決して直観と相反するものではない。第二種の認識の完成が第三種の認識であるが如く、直観はその中に理性を含むと見ることが出来ると思ふ。) 意志及び悟性に於ては the actual present existence of the body によつて傾動される限りに於てのみ、すべてを認識するが故に、必然的に irrational のものを含み、悪魔の x と與し、絶對統一を千兆粒の彼方に望むに止まり、「カラマゾフの兄弟」の中で悪魔は「俺は結局温順しくして自分の千兆粒を歩ひてその祕密を知るより外に仕方がないと思つてゐる」云々と自白してゐる。) sub specie durationis に於て認識する外はないのであるが、第三種の認識 (De Finitatione に於ては第四種) に於ては精神は現實非現實を超越せる境に高揚し、身體中の irrational を否定し盡したる the essence of the body に據つて傾動される限りに於て萬象を認識するが故に sub specie aeternitatis の認識が展かれ直接に神の中に於て萬象を見得るのである。ベルグソンの揚げ得なかつた物質及び身體はスピノーザに於ては完全に神の坐に高められ、ベルグソンの直観の極限たる永遠は、高次

なる第三種の認識 *scientia intuitiva* の場である。此處に完全に x は $\neg x$ の零となり、悪魔は、そのまゝ其の居所を失ふと言はねばならぬ。「カラマゾフの兄弟」中に言はれおるが如く、悪魔は不合理を含む意志の立場即ち「祕密ある國」に於てのみ働き得るのである。ベルグソンはアリストテレスの究極の永遠を單なる理知の空語として反駁した。然し彼自身直觀の極限としての永遠を肯定するとき、アリストテレスと同じ轍に落ちたと言ふことが出来る。スピノーザが *Def. 8, Part I*, に於て言へるが如く、永遠は持續と全然 *Ordning* を異にすると言はねばならぬ。親鸞の言ふ如く一念一罪を消し行く自力宗は命盡きんまで往生し得ず、一念よく八十億劫の重罪を滅する他力宗に於て始めて限りなき彌陀の慈光に浴し得るのである。(歎異鈔、一四・一五) Henry Bett 氏の “Johannes Scotus Erigena” 中に “The whole act of creation is in the words: And God saw that it was good (gen. i, 25), when God sees the creation, it exists, and it exists in Him, for nothing exist that does not exist in Him and He sees nothing but Himself.” (p. 32.) と書つてゐるがこの And God saw that it was good. なる言葉は移して以て我々の直觀に與ふることが出来ると思ふ。「自然の光」そのものに照し出されたる世界、すべてのイドーラを取除きたる世界、ブラウニングの All's right with the world. の世界こそ眞の直觀の前

に展かれたる純一なる世界と言ひ得るであらう。

オウグスチンは“Time cannot be without created being.” (Conf. XI.) を言つてゐるが、この created being の意味を變ずることによつて、自由に「時」をどぎめることが出来ると思ふ。the actual present existence of the bodyによつて傾働される限り、世界は永久にやむなき作用の中に存するも the essence of the bodyによつて傾働されるとき、世界はそのまゝ一の藝術品となり、現實を遊離したる意味に於て象徴であり、感覺界を越したる點に於て眞實在たる一世界が展げると思ふ。ベルグソンがその「物質と記憶」中に於て扱つた「身體」は飽迄物質の中心を占むるものであり、the actual present existence of the bodyであつた。この身體の意味を變ずることによつて、我々は何時でも低次なる持續の世界を離れ得るのである。ハアイドンによる靈の獄屋たる肉體がそのまゝ變じて、畫家の腦裡に映る人間の姿體となるとき、我々は自由にイデアの國に遊び得るであらう。此處に於ては、すべてのものが、その獨得なる運命を脊負ふて立つ。此の世界に於ける範疇は只「關係」のみである。過去の一切が現實に生きてゐる。一粒の砂も全世界との無限なる關係に於て成立し、一切は無限なる「コンビネーション」の中に存する。ダンテの「神曲」に於けるが如く、過去の一切の人物が平面の舞臺に踊り、一つの花に於

て、その蕾を現實に見得る様な世界である。スピノーザの永遠の相に於て展せられる憎むべき何物もなく、一切が美しき世界は即ちこれではないであらうか。花自身にとつては、花は蕾の發展であり、やがて果實を結ぶべき前提であらう。然し之を背後の大なる鏡に映すとき、花はそれ自身唯一無二なる獨立的存在であり、花自身の獨得なる主張である。道德的精進に於ける一々の行爲は、無限なる過程を通してやがて「從心所欲、不踰矩」の境に到る準備でもあらう。合目的作用は、やがて到達すべき極限を豫想する。然し無邊際の際に映し出された一つの花、一つの行爲は、そのまゝ一つの象徴である。それ自身全きものである。人生と云ふ大なる鏡に映し出されるとき、あらゆる人間は、人生を構成する不可缺の一員となる。單なる石塊もそれが、それ自身の脊負ふ運命と共に見られたるとき、自然を構成する不可缺なる要素となる。偉大なる畫家によつて畫き出された一木一草も、一片の雲も、全自然との直接なる關係を示してゐるが如くに見える。合目的作用中の一々の點は、この鏡と直接なる連りを保ち、作用上の單なる一事件も背後の全體の中に含まれてゐる。他力宗敎の根本は此處にあるのではなからうか。ロダンの「美は存在する一切のものゝ中に存する」と云ふ言葉と、ゲーテの「それが存在するが故に永遠なり」とはシイノニムで

ある。一切を美と見るがためには、先づ全體との關係に於てみねばならぬ。物を全體との關係に於て見んがためには先づ、愛憎執着の本據たる the actual present existence of the body を捨て、自身をば象徴の世界に迄引上げねばならぬ。身體が、地を離れて現實非現實の境を越すとき一切はイデアの國に迄高められるのである。サンタヤーナは「エチカ」英譯の序文中に「永遠の相」を單に歴史的因果的に一切に對する見方として「When a man's life is over, it remains true that he has lived; it remains true that he has been one sort of man, and not another. In the infinite mosaic of history that bit has its unfading colour and its perpetual function and effect. A man who understands himself under the form of eternity knows the quality that eternally belongs to him, and knows that he cannot wholly die, even if he would; for when the movement of his life is over, the truth of his life remains. (p. xvii)」と言つてゐるが、私は單に過去にありしものが尙現在に影響しおるが故に直ちに之を永遠と見ることは出来ない。スピノーザの眞面目はそのミステシイストにあり、その第三種の認識、永遠の相はこれを如實に物語つてゐると思ふ。彼に於ては一切の過去は事實生きてゐた。時間進化途上に換え難き位置を占めたるが故に永遠であるのでなく、時間を超越して現在それが潑刺として生きてゐるが故に永遠なのである。「薔薇の中に幼時を嗅

ぐと云ふ如く、スピノーザに於ても一切は現在に生きており、一切が無涯なる鏡に映されて美しきが故に永遠であつたのである。

シュライエルマツヘルは、*„Der Punkt, der eine Linie durchschneidet, ist nicht ein Teil von ihr; er bezieht sich auf das Unendliche ebenso eigentlich und unmittelbar, als auf sie; und überall in ihr kanst du einen solchen Punkt setzen.“* (Monologen I.) と言ひかゝることは直観に於て如實に知られるとし「内」に向けられたる眼を以て對すれば即ち、*„Betrachtung“* od. *„Reflexion“* に於ては我は直ちに時間界を去つて永遠の國に遊び得ずべては「人性」の中に不可缺なるものとして含まれてゐることも言つてゐる。又ロイスが *„At every instant in the temporal order, God's will is in process of expressing itself. Now since this is true of every instant, it follows that every stage of the world process, viewed as God views it, stands in an immediate relation to God's whole purpose.“* (Royce; *The World and the Individual*, II. p. 420.) と言ふ如く、人格時中の一々の點は、直ちに全體の中に含まれてゐるのである。然しかゝることは只「内」に向けられたる眼にのみ現はれ、*„Viewed as God views.“* と云ふべき直観に於てのみ見られる。シュライエルマツヘルは暗にフイヒテを攻撃して、彼等は自身決して到達することを出来ぬ神を思想によつて想定し、不死不滅を in und über zeit に求めず暢氣に nach der

zeit に之を求め、影の如き永遠の中に精神を葬り去り、只過去の活動の影像のみが生命を保持すると信じてゐる。然るに一度眼を内に向ければ影の世界は直ちに現實であり、彼等が時間的世界の無限の彼方に求めたる神、死することによつて結びつく永遠は飛揚せる精神にとつては直接なる實在であると云ふ意味のことを言つてゐる。(op. cit.) 若し永遠を目的論的作用の Endzweck としてのポスチュラートとし、時間の究極に之を求むるとき我々は必然的に、ベルグソンが古代哲學に向けたる反駁を受けねばならぬ。(ベルグソンは Creative Evro. p. 383. に於てカント以後の獨逸哲學を批評し「彼等は個々の形態をば悉く唯一完全な存在の顯現と見做し、この存在から直接に個々の形態をば演譯しようとしてゐる。彼等の哲學は彼等の想像するよりも遙かに機械論に近いものである」と言つてゐる。) 機械論、目的論の成立する所の irrational を含む意志の立場に見て見られた永遠はベルグソンによつて明かに否定せられた。然し「Betrachtung, "Viewed as God views" に於ける永遠はベルグソン自身の説の根本基底とも言はるべきであらう。一者を仰がんがためには飽くまで temporal view を捨てねばならぬ。悪魔の々を零にして意志否定の立場に立たねばならぬ。作用を映す知るものゝ立場に沈潜せねばならぬ。

五

時が單に均等的にもあらず、燃え移る炎の如く單にその瞬間のみを照す數學的瞬間にもあらず、意識はその瞬間々々に生れ變るものにも非ずして、それがすべて記憶であり、現在に於ける過去の保存であり、蓄積であり、「西宮藤朝譯」意識と生命、「一三二頁」現在を過去の集中點とし、昨日の意識と今日の意識とに統一的連絡あることを主張する以上、その全過去を包むもの、昨日の意識を貯ふるものが無ければならぬ。ベルグソンは、かゝるものを純粹記憶と名づけてゐるが、(Cf. Matter and Memory, chap. III.) これは果して何處に貯へられてゐるのであるか。或人は脳髓とも言ふであらう。然しベルグソン自身の言ふ如く、「脳髓は空間に延長を有する形像である限り、只現在の瞬間を占有することしか出來ない。」(Matter and Memory, p. 192) ベルグソンは純粹記憶とは存在することを止めたものにあらずして、單に無力なるものと化したるに過ぎずとして、之が「無意識」の中に存すると信じてゐるやうであるが、「無意識」とは果して如何なるものであるか。無意識に意識されてゐると云ふ事はそれ自身矛盾ではないか。我々は更に「無意識」とは果して何處に貯へられてゐるかを問ひたい。無意

識を意識と同列に考ふるとき、無意識の意識と云ふ如きものを許すことは出来ぬ。我々はこゝに於てシユライエルマツヘルの「メシハイ人性」やロイスの「メシハイ神」の如き考へに必然的に進まざるを得ない。時や背後に一般的なるものを許すこと自身が純粹持續を唯一實在とするベルグソンの自滅であるにも拘はらず、彼の純粹記憶説は暗々裡にかゝるものを取入れてゐるやうに見える。高次的なる全體を許すこと無くして純粹記憶それ自身が成立し得ないのである。ベルグソンが理知によつて見る橙色は單色としての橙色であるが、これを持續の相に於て見れば橙色は赤と黄との中間色であり、且黄の背後には全スペクトラムの色を負ふと言つてゐる如く黄より赤に進む背後には變じて然かも變せざる高次的なる全體との關係がなければならぬ。昨日の意識と今日の意識とが直ちに連なるのは背後に兩者を包む全體が存し、現在が單に數學的瞬間に非ずして全過去を負ふ先端と考へられるのは、純粹記憶の坐ども云ふべき神(ロイス)の中の履歷書に一々の行爲がその順序を追ふて記入されてゐるが故であるフランクが、すべての歴史的事實は、*Unmittelbare Beziehung auf die Gottheit* に於て存すると言ふ如く (Royce; *The World and the Individual*, II. p. 425. に依る) すべてを爲行は全體との直接なる關係を有すると言はねばならぬ。Blake が

To see a World in a grain of sands

And a Heaven in a wild flower,

Hold Infinity in the palm of your hands

And Eternity in an hour.

と詠える如く一粒の砂を雖も尙全世界との密接なる關係を有し、全宇宙のあらゆる力、あらゆる眞理がこの一砂粒に働くことによつて始めて存在し得るのである。「彌陀の五劫思惟の願をよくく案すれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。」(歎異鈔、一八)この宗教の根本的確信は、背後にひそむ全體の中に含まれゐることを知るとき生ずるのであらう。現實の背後には、スコウスト、ホリーダナの not creating and not created とも云ふべき名状すべからざる無限の知的空間とも言はるべきものがなければならぬ。"What ever is known is a kind of accident of the underlying unknown and unknowable substance." (H. Bett; Johannes Scotus Erigena, p.22.) 又、ひびきた "Attribute is the Reality as known," (Joachim; A study of the Ethics of Spinoza p. 26) を言ふ如く、知り得るもの、背後には、能迄知り得ざるものがなければならぬ。何等の言葉を以ても表現し得ざるもの、スピノーザの語、 Absolutely characterless のものがなければならぬ。God is infinite, and more than infinite:

the infinitude of infinitudes. He is the similitude of the similar and the dissimilitude of the dissimilar; the oppo-*s*i-*e* of opposites and contrary of contraries, (H. Bett; op. cit. p. 26) を言ふ如く、差別相の背後に差別無差別を超越して、これを内に包むものあるによつて始めて、差別そのものが可能となるのである。かく見るとき、ヘルグソンの眞實在たる純粹持續も、それが「流れる」と云ふ一固定性を有する限り、accidentの世界、attributeの世界たるを免れぬ。オウグスチンは「現在」を時の規準とし、過去は記憶に於て成立する、*a present of thing past* とし、未來は期待に於て成立する *a present of thing future* としてゐるが、かゝる現在に直ちに *Thy Today, is Eternity.* を云ふべし、神に抱かれ居ることに依つて、よくその記憶を期待とを連ね得るのである。(Cf. Augustinus; Conf. XI.) これあるによつて始めて時が一度的であり、heterogeneousたるを得るのである。私はオウグスチンが “The present hath no space.” (Conf. XI.) を言つたとき既にヘルグソンの先驅と言ふを得ると思ふ。然も尙オウグスチンが「時も尙神の創造にかゝわる」と言ひ、恒久の現在たる神を説いたところに深い興味を感ぜざるを得ない。

ロイスが “A person is a conscious being, whose life, *temporally viewed*, seeks its completion through deeds, while this same life, *eternally viewed*, consciously attains its perfection by means of the

present knowledge of the whole of its temporal striving." (op. cit. s. 418) と言ふが如く我々は自他對立的なる時の渦中に營むものとしてあるときは、未だ全體を見ることは出來ぬ。暫く現實非現實を越したる所に遊ぶものとしてあるとき、我は直ちに永遠の中、神の懷に存することを知るのであらう。パスカルの人間は蘆の如く弱し、云々と云ふが如き大信念は、高次なる eternal view に於て全體を如實に知るとき生れるのであると思ふ。ロイスも我は世界進化途上の單なる一インシデントであり、高々^{タカク}エピソードに過ぎざるも、よし弱くとも之を知るが故に我が個性は神の中に含まると言つてゐる。(Cf. op. cit. p. 417) 單に持續の中に營むものとしてある間は、ステルナアの所謂「自由人」に止まるも、知るものゝ立場、意志が方向を失ひたる直觀の場に立つとき、ステルナアの無の世界が展かれ、我は一切の「所有人」となるのである。ベルグソンが *specie durationis* の極限におきたる永遠は *sub specie aeternitatis* に於ては眼前に展開されたる現實であり、ベルグソンの直觀の極限に展ける *Verdichtung aller Dauer* の永遠こそ純なる我々の直觀の常住の場である。現在がかゝる永遠に直接に接し居るが故に我々の人格が統一を保ち得、各人の意識がかゝる共同的なる知的空間に座席を占むるが故に我々は始めて思想の交接をなし得るのである。畫家が一平面に無限なる

時の経過を寫し得、彫刻家が無限なる動きを一塊の大理石に刻み得るのも、かゝる永遠の世界にその對象を見るが故であらう。かく見ることによつて我々は occasionalism に新らしき意義を見出し得ると思ふ。

Wordsworth が “Thought is not; in enjoyment it expired.” と言ふと、Thought is not と云ふは temporal view を離れる、つまり in enjoyment とは直ちに in eternity である。我々はヘルグソンの如く直觀の對象を單なる純粹持續の世界を考ふことが出来ぬ。氏の直觀は未だ temporal view を出でず對立的なる thought の圈内にあると言はねばならぬと思ふ。直觀は飽く迄一なるものへ注がるべきである。直觀の場は、マックス・ステルナアの云ふ如くあらゆる Spuk を取除きたる „Ich hab' mein' Sach' auf Nichts gestellt” と云ふべき創造的無の立場、ヘリイゲナの第四の立場であらう。Ruyssbroeck が “So soon as we are uplifted and drawn into our highest feeling, all our powers stand idle in an essential fruition; but our powers do not pass away into nothingness, for then we should lose our created being. And as long as we stand idle with an inclined spirit and with open eyes, but without reflection, so long as we can complete and have fruition.” (C.E. Rolf; Dionysus the Areopagite, Introduction, p. 37) 依る。と言へるは直觀の眞景を述べて遺憾なしと思ふ。これ、Verdichtung aller

Dauer の世界であらう。ベルグソンはかゝる境を單に純粹記憶に復歸したる「夢想」として簡單にかたづけけるであらう。(Cf. Matter and Memory, p. 200. 及び錦田氏譯「流動の哲學」一九〇頁。)然し純粹記憶の坐を高次的なる全體、ロイスの云ふ神、ルイスブレーク〇 the fathomless abyss of our eternal blessedness. としたる我々にとつては、これこそ神人合一〇境であり、シュライエルマツヘルの絶對依憑の感であり、「御心のまゝになし給へ」なる敬虔なる宗教的境地である。

時間線上の無限の彼方、道德的精進シテトレイベンの達すべからざる究極に要請としての永遠を求むるとき、宗教の獨立性は失はれると共に、ベルグソンの反駁を肯定せざるを得ない。然しベルグソン自身の言ふ如く「我々は永遠の中に生活し、運動し、存在してゐるのである。」(錦田氏譯「流動の哲學」二〇七頁。)ベルグソンはかゝる躍動せる永遠が直接に現實の背後に存することを肯定しながら、之を直觀の極限におき、一方直觀に與へられたる純粹持續を唯一實在としながらその根源にかゝる永遠を許容することに於て未だ不徹底たるを免れ得ないと思ふ。(完)

これは私の卒業論文に多少補正の筆を加へたものである。諸先生より懇切細密なる御注意を載いたに拘はらず、私の現在力として如何ともなし難かつた所のあることを遺憾に思ふ。